

■ 書評 ■

『利他学』

小田亮著，新潮社，2011年5月，255頁，本体価格1200円

心（知能）の働きにより惹起される行動のほとんどは、自身の遺伝子を後世に伝えることに寄与するように読み取れ、これが進化の原動力である。しかし、これと矛盾した行動に見える他人あるいは他個体を助ける現象（＝「自分に損な行動（p34）」）をおもに行動学と進化学から解説した書である。しかし、チスイコウモリやクビワペッカーなどで観察されている利他的行動に関して、ここで得られた理論を結論を外挿することは難しい。あくまでも、ヒト、あるいはその祖先に近い大型類人猿に限定的である。それもそのはずで、本書で引用された文献一覧を一瞥すれば経済学、言語学、犯罪学、論理学、心理学、民族学などヒトあるいは人間（社会）の営みに関わる領域の知見が多数盛り込まれていることから判るし、本書で紹介された興味深い実験・野外観察の数々はヒトやチンパンジー（まれにマーモセット）が中心だからである。とくに、著者が京都大学霊長類研究所時代に調査研究された内容はとても緻密で迫力もあり、サル類に興味を持つ学生には、必ず紹介したい一冊である。

本書を構成する6つの章は、この利他的行動を仕組み、機能、発達および歴史の側面からアプローチして、バランス良く各章で解説されている。第1章では心と行動は生理学のみならず、進化学の対象にもなることをティンバーゲンの「なぜ」や血縁度（ハミルトンの法則）など用い提起した。次いで、第2章では他人の「目」がその重要な因子であるという仮説の検証で、そのものずばりのジェネレーターとは言い難くても、相当強力なアクセレーターであることは理解できた。第3章では、利他という「善」の表裏をなす裏切り、「悪」についての解説である。キーワードとして罰、同情、義憤、罪悪感、感謝、評判など検証面では少々

手強い（と思われる）概念を用い果敢に挑戦されていたが、これらは受け手とやり手の間のダイナミクスとして、微笑みや目尻のしわなどの装置がコストをかけて進化（発達）し、これを利用した詐欺師も登場したという軍拡競争のような仮説が第4章に展開する。これらメカニズムの進化的（比較動物学的）な起源と今後の展望を第5および6章で紹介されている。ここで利他性に関わる重要な現象として、コモンスターモセットの共同繁殖・育児（ヘルパーの存在）を取り上げ、これはチンパンジーには見られないことから、必ずしも系統性を反映しないという。しかし、学習が認められるのは、類人猿からの特色であるので、共同育児と学習の強化（文化の誕生）がヒトへの進化（発展）となったとされた。なお、閑話休題的な分析であるが、ヒトにおいては極度に進化（変化）し、一方的に支出するという表現型、たとえば「自粛」（東日本大震災時の）の解釈は、ユニークな見方であった。

脱線ついでに、著者が「教育は非常に利他的な行為である」と断じている点（p186）には、ハッとさせられた。評者も大学教員であり、またこれを目にされる方の中にも同業の方が多いので、理解をしてもらえるはずだが、教える内容のどの程度までのものが給与に見合うのかは明確ではない（p232）。「大学教育はボランティア」と断言した評者の同僚がいた。既知の果てまで教えることも、資格試験をクリア程度で十分でも構わない。要するに、良心に沿った適正な質と量が肝心なのだ。人類の未来のため（利他的に）、優れた大学教育を目指すことがトップ・プライオリティなのだとも再認識させてくれた書ともなった。

（浅川満彦／酪農学園大学）